

1977. 7

試験が近づきました。

前期試験に備えて、いくつかお知らせいたします。

1) 開館時間について

平日 9時から6時まで

土曜 9時から1時まで

(但し、7/9(土)、7/16(土)のみ9時から3時まで開館)

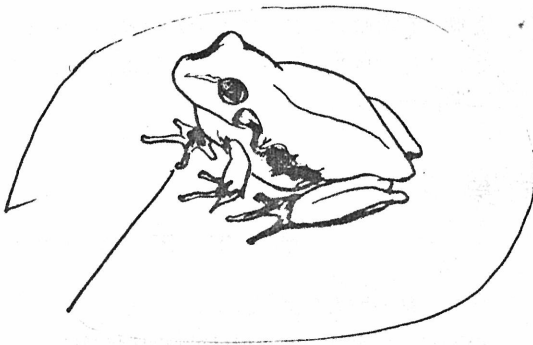
2) 一部図書の貸出期限変更について

試験期には、いつも一部の図書に予約が集中しますので、予約の多いものに限
り、オーバーナイト貸出、三日貸出等の
貸出期限の変更をいたします。

3) 複写について

申込が増えますので、複写はすぐには
出来ません。

図書館内の図書以外は複写受付致し
ません。



夏休み中のお知らせ

夏休み中の開館、貸出等につきお知らせし
ます。

1) 夏休み長期貸出し

・ 貸出期間

7/20(水)～9/22(木)

・ 貸出冊数

1人3冊

2) 夏休み中の開館時間

(7/21(木)～9/17(土))

・ 平日 10時から3時

・ 土曜 10時から1時

ひとこと

新入生の皆さんも、北里に入学して3
カ月経ち、大学生活にもようやく馴れた
頃だと思います。

そこで今回は、1年生の利用者の方に
教養図書館を利用してみた感想を寄せて
戴きましたので、4ページに特集致しました。

他の利用者の方も、このニュースにぜ
ひ投稿して下さい。イラストでも、何か
楽しい話題でも、歓迎します。

まもなく、待ちに待った夏休みです。
前記試験も近づいています。楽しい休暇
を過ごす為に精一ぱい頑張ってください。

忘れられぬ二冊の本

正 田 庄 次 郎 (経済)

いつ頃読んだのか定かでないが、たしか、中学校(旧制)のおわり頃か、大学予科に入りたて(昭和19年)の頃に偶然手にした本が『土』であった。長塚節がどんな人かも知らずに読み始めたのだが、ひきこまれるように一気によみ終った時、やりきれない息苦しさといひようもない不安にとりつかれた印象が鮮明に残っている。それは、感動とよぶ性質のものではなかった。当時私たちは、勤労奉仕で、農村によく出かけた。農村の、昼の静けさも、夜の闇も、私の心を圧迫し、いいしれない不安の感情をよびおこした。私が『土』からうけた息苦しさは、これとある部分は同質であったが、これと異質の部分もあった。異質の部分は、農村という自然が与えた不安ではなく、その自然を生活の場として生きている農民の、きわめて具体的な「生」の姿、そして農村における人間関係が生み出す不安であった。茨城という、東京からいくらかも離れていないところで、「下卑で、浅薄で、迷信が強く、無邪気で、狡猾で、無欲で、強欲で」(漱石)、ほとんど私の想像を絶した獣的姿で生きる農民が存在しているという事実を目を洗われるおもしろいであった。しかも、この事実と自分の生がどこかでつながっているのではないか、あるいはつながってくるのではないかといった気持が、私を不安にしたのだと思う。

私が、大学で農業問題を専攻した事とこれが関係があるかどうか分らないが、『土』が私の経験の外にある世界を教え、若い私の心に生涯消

えぬ「問い」を与えたことはたしかであろう。

＊ ＊ ＊

私は、戦争の終末を大学予科の時代にむかえた。私たちにとって、平和は、本屋に並ぶ行列から始まった。このようなときに、ザラ紙に印刷されたパンフレットの一冊に、エンゲルスの『フォイエルバッハ論』があった。

戦争中、青年の心をとらえたいいくつかの本は、極度の観念性が、私の理解と資質をこえるものであった。しかし、手にしたパンフレットは、私に、論理の美しさと、力強さを教えた。ヘーゲルの「現実的なものは合理的なものであり、合理的なものは現実的である」というテーゼを、逆手にとって、ヘーゲル哲学の歴史的評価を行なう手口に驚嘆した。学問は難解なものというそれまでの苦手意識が、それによって変ってきた。

この本が、私に強い印象を与えたもう一つの部分は、フォイエルバッハの愛の観念性を鋭く批判したところである。観念的に、愛を讃美するには、私の青年時代の心は暗すぎた。資質が暗いといういみでなく、おかれた環境が暗い部分をもちすぎていた。こうした個としての実感にしばられていた私が、愛をよみがえさせる社会的、歴史的条件を前面におし出して、フォイエルバッハを批判するエンゲルスの論理にふれた時、私の暗い心に、あたたかい火がもえた。この本は、感動の涙を流した、私にとってただ一冊の本である。

「自分の翼で巣立つ時」

武 下 正 次 (体育)

「発展」という文字を辞典で調べてみると、量の増大が質の変化をよびおこし、質の変化が、

また、量の増大をよびおこすというように、この両者の間には、深い相互媒介関係が具体化さ

れて成り立つということですが、このことは、読書に対しても、あてはめることが出来るように思います。

「自分の翼で巣立つ時」という本を最近、読んだことがあります。これは盲学校の子どものたちの学校生活の姿を細かく書いているもので、私が、この本を手にした理由には、朝の通勤バスの中で、いつも一緒になる、鶴川ろう話学校の子供たちの明るく伸々した、やりとりを見て感銘を受け、この子供たちのことを少しでも理解できたらと思ったからです。

バスの中での子供たちは、他の小・中学生が「静」とすると対象的に「動」という表現が出来ると思います。

男女をとわず、狭い所で席のうばい合いをやったり、あちらこちらに動き回って、外国の人が表現する時に似たように、みぶり、てぶり、

体全体で自分の意志を相手に伝えようと必死になって、はしゃいでいる。

囲りにいる私たちのことなど、ぜんぜん気にもとめず、マイペースで毎日いろんなゲーム遊びや会話を一生懸命やっている。その、子供たちの姿に考えさせられました。

将来、この子供たちが学校を卒業し就職する段階でも、大きな困難に直面することと思いますが、これからは、ひとりひとりの能力に応じた、より高い教育が受けられるような、学校を社会全体が考えてほしいと思います。

これは子供たち本人の努力と一般の人々の協力さえあれば、不可能なことではないと信じます。近頃、「テレビ」、「ラジオ」、「新聞」とマスコミの報道する事件の多い中、お互いの心を、ゆさぶる、こうした情操教育が本当に大切であることを、今更ながら感じました。

本 と 私

石 田 健 郎 (数学)

図書館のこの紙面がついに私に回って来てしまったのを機にこれまでの読書について考えてみたい。良い悪いは別にして。

昨年であったか、教養部図書館より各教員に、今までに“感銘を受けた本”を推薦してくれと依頼があった折、ハタと考えこんだ。

何冊もありそうな気がしたがイザとなるとなかなか適当なものがない。まして推薦図書として学生諸君の前に出るとなるとどれをあげたらよいかさっぱりわからない。いくら感動した本だといっても中学時代に読んだ本をあげるわけにはいかないから。そんなわけで大学の終りの方で読んだ本で印象に残っていた本として「人間の条件」をあげた。たしか4分冊位になっていたのを、他の事は投げだしておいて、一気に読んだと記憶している。しかし今、現在もう一度読んで又感動するかはわからないし、又他人が読んでどう思うかも知らない。

部分部分ではあるが、そして読むたびに非常に感動し、又ある時は、読むことに負担を感じる本として聖書がある。

私の読書は面白そうな、易しい本をあっちの分野、こっちの分野よりみつけてきては読み散らかすといったもので、系統だって本を読むといったことがあまりない。あまりの大作やむずかしそうな本は最初より敬遠して来た。割合印象に残っている本でももう一度読んでみたいといった本はない。前の印象が壊れるのが怖いからかもしれない。

本について思い出すことは、学生の時、先生が少し高価な本を参考書としてあげ、他に使うお金があったら、よい本を買いなさい。高いといっても、何カ月も、何年間も読めることを考えれば安いものですよ。といった言葉である。生涯のメシの種になるような本さえもあるかもしれない。

本との出会い

1T 国府田悦造

僕が教養図書館に初めて行ったのは、学校が始まってまもない昼休みだった。本にあまり縁のなかった自分なので、特に本が読みたいという理由ではなく、ただなんとなく行き、またなんとなく数冊の本を借りた。それ以来どういうわけか、一週間ごとに図書館に通うようになってしまい、教科書さえあまり開かなかった僕が、借りてきた本を必死で読むようになった。

諸君の中には、本を読むことの意義を充分にとらえ、教養を高めるために、また余暇を充実させるために読書をされる方も多いと思います。しかし、僕の場合そういう意識を忘れ、ただなんとなくという肩の力のぬけたような今、やっ

と本と友達になれました。またこの間、講演に来て下さった宮本常一先生が「本には著者の思想が生きている」とおっしゃっておられましたが、なるほど本にはテレビやラジオでは得られない色々な物があると、しだいにわかってきました。

そして今、未熟な自分ながら思うことは、教養部のいや大学の中心的存在である図書館を、より多くの人に利用していただき、本と親しくなってほしいことと、これから一生の間つき合う親友を紹介してくれた教養図書館に、一言お礼を言いたいと思います。

図書館を利用して思うこと

1F 淵上信好

大学へやって来て既に2カ月たってしまった。それで僕が一番通う所といえば、今のところ、教室、食堂、クラブ部室、そして何故か図書館。

初めて図書館に行ったのは、ガイダンスも終り授業も始まりだした4月の中旬だった。中に這入り廻りを見回して目についたのは、雑誌のやたら多いことだった。最初に手にした本と云えば「栄養と料理」だった。下宿生活の僕にとって生活防衛は、必然的で先ず食べることは大事な問題だった。翌日、図書館で茶碗蒸しの作り方を尋ねたとき親切に教えてくれたことがとても嬉しかった。

床は所々ハゲかかっていて、椅子のきしむ音

はするけれども、本が有って、何処にどんな本が有るかを知っている人がいて、本の好きな学生が居ればそれで十分だと思う。

旺文社をやっと放れられた今、これだけ様々な本を前にすると、自分があまりにも知らな過ぎること、自分が本を本当に楽しんではいなかったこと(漫画は除く)と思わずにはいられない。

色々な利用の仕方があると思う。雑誌ばかり読むことだって1日1冊読んでも余ってしまう。自習に使ったり、レポートを写したりも出来る。

二年になればたこの図書館ともお別れだし、色々な方面から利用したいと思う。